香 川 大 学 経 済 論 叢
第94巻 第3号 2021年12月　135－151

研究ノート

香川大学生のオンライン授業に対する評価と今後の意向（その２）

山　崎　隆　之

１．はじめに

2020年１月に始まった新型コロナウイルスの流行（コロナ禍）から，１年半が経過した。この間，香川大学では感染対策の一環として2020年度前学期から全面的なオンライン授業[(1)]の実施が行われることとなったが，2020年度後学期には一部で対面授業が再開，2021年度前学期には原則対面授業としつつ受講生の多い講義科目ではハイブリッド型授業[(2)]が導入された。このように段階的に対面授業の実施が拡大されつつも，形を変えながらオンライン授業を取り入れた授業実施体制が現在まで続いている。

筆者は，2020年度前学期末（2020年７月）時点での香川大学生のオンライン授業に対する評価と今後の意向について，筆者の担当講義を受講した学生に対してアンケート調査を行い，その結果を報告[(3)]した。その後も，筆者の担当講義を受講した経済学

（１）　オンライン講義は①ウェブ会議システムを使った「リアルタイム型」，②授業を動画で作成し，蓄積したファイルを学生が都合のよいときに見る「オンデマンド型」，③動画は使わずに登録した資料を学生が読み，レポートなどを提出する「資料配布型」の大きく３つに大別できる。
　出典：東洋経済オンライン（2020年５月26日）「大学「オンライン講義」はどう行われているのか」https://toyokeizai.net/articles/print/352381

（２）　香川大学における「ハイブリッド型授業」は，受講学生を学籍番号の末尾が奇数か偶数かで二組に分け，それぞれの組に対して，受講方法を「教室での対面授業」と「遠隔でのオンライン授業」で毎週入れ替える方式となっている。この方式により，「教室での対面授業」を受講する学生の数を教室定員（受講定員）に対して約半数とすることができる。

（３）　山崎隆之（2020）香川大学生のオンライン授業に対する評価と今後の意向（その１），香川大学経済論叢第93巻３号，pp. 209-235

部１年生を対象として2020年度後学期（2021年２月），2021年度前学期（2021年７月）に同様のアンケート調査を実施しており，2020年度前学期にアンケート調査をした学生（１年生）の後学期の状況，2020年度１年生と2021年度１年生の違いなどを確認できた。そこで本稿では，2020年度前学期の調査のうち１年生の回答結果と比較しながらこれらの調査結果を整理するとともに，今後オンライン授業を継続する場合の実施形式についても考察を加えたい。

２．2020年度後学期（2021年２月）調査

２－１．調査概要

このアンケート調査は，2020年度の香川大学経済学部「観光学概論」受講生に対して実施された。Google Formsで作成したアンケートフォーム「第２回オンライン授業への評価と今後の意向に関するアンケート」のURLを授業最終回（2021年２月２日）に示し，授業時間内に回答を促すとともに，授業資料を掲載している香大Moodle上に同URLを約１カ月掲載した。この授業における経済学部１年生の受講生は231人，回答数は130人，回答率は56.3％であった。

このアンケート調査では，前学期からの変化を確認するために，2020年度前学期（2020年７月）調査と同じ設問（「オンライン授業への満足度」「今後の授業形式に対する意向」）を設けたほか，後学期の対面授業の受講状況や2020年度一年間の大学生活への評価についてたずねた。

２－２．調査結果ならびに分析

①対面授業の受講状況

前述のとおり，2020年度後学期は一部で対面授業が再開されたが，学生それぞれにとって再開された対面授業はどの程度だったのかについて，受講科目の中で対面授業が実施された科目数をたずねた（表１）。その結果は，対面授業が実施された受講科目数が複数あった学生が３割程度，１つのみだった学生が５割程度で，受講科目に対面授業がなかった学生も１割程度いた。

また，対面授業を実施した授業の中でも対面参加が可能であったのは一部の回のみ

表１　2020 年度後学期で対面授業が実施された科目数

	回答数（人）	割合（%）
対面授業を実施した授業はなかった	17	13.1
１つの授業で対面授業が実施された	68	52.3
２つ以上の授業で対面授業が実施された	45	34.6
合　　計	130	100.0

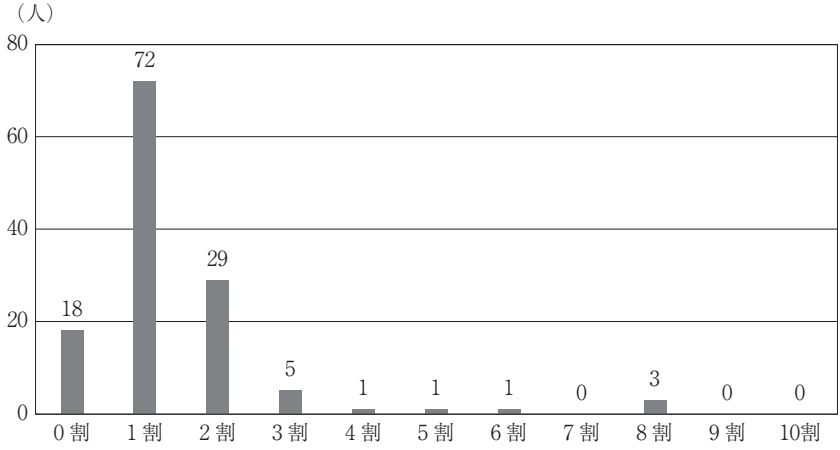

図１　2020 年度後学期での対面授業の割合

であった授業もあることから，受講した授業全体の授業回数のうちどのくらいの割合が対面授業だったかを合わせてたずねたところ（図１），全体平均は 1.42 割で，半数以上が１割となり，対面授業が３割以上と回答した学生は１割以下だった。

こうしてみると，学生にとって 2020 年度後学期の対面授業再開は，およそ週に１回ほど対面授業があるといった程度の非常に限定的なものであったことがわかる。

②オンライン授業の満足度と評価の変化

次に，2020 年度前学期（2020 年７月）調査と同様に，香川大学のオンライン授業に満足しているかを５段階（満足，やや満足，どちらとも言えない，やや不満，不満）

表２　オンライン授業に対する満足度

		2021年２月調査	2020年度前期の評価との比較					参考：2020年７月調査（１年生分）
			高くなった	やや高くなった	変わらない	やや低くなった	低くなった	
満足【５】		14	5	5	4	0	0	34
	割合（%）	10.8	83.3	12.5	5.1	0.0	0.0	17.3
やや満足【４】		56	1	24	31	0	0	78
	割合（%）	43.1	16.7	60.0	39.2	0.0	0.0	39.6
どちらとも言えない【３】		48	0	9	39	0	0	52
	割合（%）	36.9	0.0	22.5	49.4	0.0	0.0	26.4
やや不満【２】		8	0	2	4	1	1	25
	割合（%）	6.2	0.0	5.0	5.1	50.0	33.3	12.7
不満【１】		4	0	0	1	1	2	8
	割合（%）	3.1	0.0	0.0	1.3	50.0	66.7	4.1
計		130	6	40	79	2	3	197
	割合（%）	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
平均値		3.52						3.53

※平均値は，各評価を【　】内の得点に換算して算出

でたずねた（表２）。

その結果，各評価を得点化して算出した評価の全体平均値は2020年度前学期とほぼ同じ（2020年度前学期：3.53，2020年度後学期：3.52）であった。それぞれの段階についての回答率を2020年度前学期（2020年７月）調査と比較すると，「満足」「やや不満」がやや減少して「どちらとも言えない」「やや満足」が増加しており，全体平均から大きく外れた評価が減少して学生の評価のばらつきが2020年度前学期に比べて収斂しているように見える。

また，2020年度前学期と比べてオンライン授業への評価が変化したかをたずねたところ（表２中列），半数以上が「変わらない」，３割程度が「やや高くなった」と回答した。その理由についてたずねた自由記述の回答では，「やや高くなった」の理由としては「オンライン講義に慣れてきた」「自分なりに気晴らしする方法がわかった」「先生方がZoomの扱い方に慣れてきた」「オンラインならではの講義が行われるよう

になった」のように，学生・教員それぞれがオンライン授業という新しい授業形式にうまく対応できるようになったことを指摘する回答が多く見られた。その一方で，オンライン授業の評価が「やや低くなった」「低くなった」との回答は少数ではあったが，その理由として「ただ聞くだけの講義で思っていた大学の講義とは異なっていた」「内容が難しい授業がオンラインだと理解が難しくなる」をあげる学生もいた。少数意見ではあるものの，今後のオンライン授業を考えるうえで本質的な課題を指摘しているように思われる。

③ 2020 年度の大学生活の採点

続いて，授業以外のサークル活動や他の学生との交流を含めた大学生活全般についての評価を確認するため，2020 年 4 月以降およそ 1 年間の大学生活を 10 点満点で採点するとしたら何点をつけるかをたずねた（図 2）。

その結果，最頻値は 5 点（29 名）で，3 ～ 6 点を回答した学生がそれぞれ 20 名以上おり，回答者全体の平均は 4.56 点となった。通常，10 点満点では 7 ～ 8 点以上が「良い」という評価であると考えられることから，2020 年度の大学生活はほとんどの学生にとって不満の残るものと評価されたと言える。

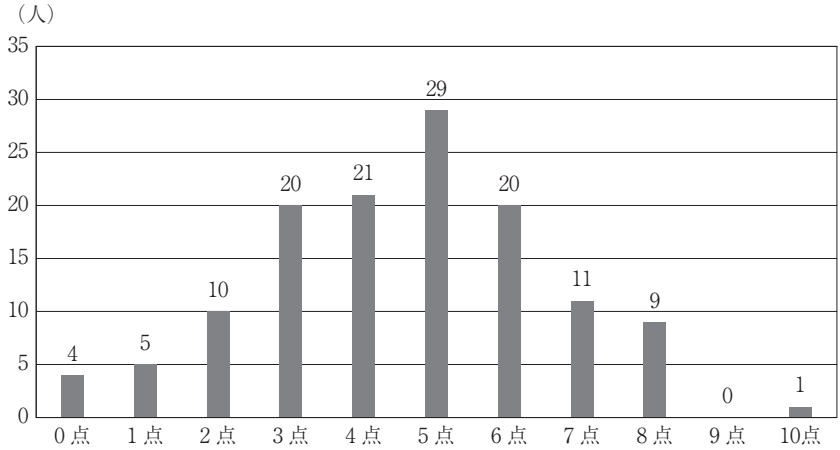

図 2　2020 年度の大学生活の採点（10 点満点）

また，回答した点数をつけた理由についてたずねた自由記述回答では，以下のようなものがあげられた。

【7点以上】

「部活に入り，かなり友人ができた」（回答：8点）

「対面での授業が少なく，まだちゃんと大学生になれたという実感がない」（回答：8点）

「やりたいことがやりたいようにできなかったが，充実した生活を送ることができた」（回答：7点）

【5～6点】

「かなり制限を受けているにもかかわらず，満足してしまっている」（回答：6点）

「それなりに単位も取り，バイトなどの私生活も大きな問題なく過ごせた」（回答：6点）

「大学に入学してから，大学構内に入ったことが数える程度しかなく，大学生活が送れていると実感することが少ない」（回答：6点）

「学生プロジェクトに所属していたため，コロナ禍でも大学生活の思い出はできたと思う。でもイベントが中止になってしまったり，思い通りにいかないことも多かった」（回答：6点）

「積極的に人と関わることがなく，充実感や大学に通っている実感がなかった」（回答：5点）

【3～4点】

「サークルに入った自分の決断に今は感謝している。もしサークルに入っていなかったら友達も先輩もできずにずっと孤独だった」（回答：4点）

「まだ大学で友達を作ることができておらず，高校生の時に想像していた状況と全く違う」（回答：4点）

「外出する機会が少なく，交友関係は変わらず，生活習慣も乱れた」（回答：4点）

「なまけ癖がついてしまっている」（回答：４点）

「何もせずに１年が過ぎて行った気がする」（回答：３点）

【２点以下】

「プロジェクト活動や対面授業ができず，大学の人との関係を深められなかった」（回答：２点）

「人と会う機会がなく高校のほうが楽しかった。自分で積極的に行動しろとみんなから言われたが，人見知りなためどうしてもできなかった」（回答：２点）

「時期を逃してサークルや部活に入らず，生活が高校時代と何ら変化がない。高校時代の方が圧倒的に充実していた」（回答：２点）

「人と会っていないことで新たな刺激なども受けられず，時間だけが過ぎた」（回答：１点）

「授業はオンラインでも構わないと思っているが，サークルの活動やプライベートの充実など，それ以外に出来ないことや制限されることが多くて楽しくない，苦しい」（回答：１点）

「全く楽しくない」（回答：０点）

これらを見ると，採点では８点と比較的高い点数をつけた学生でも「大学生になれた実感がない」という回答があったほか，様々な制限がある生活のため「交友関係は変わらず」「高校時代と何ら変化がない」という回答が見られ，所属が高校から大学へとアップデートしたにも関わらず，ライフスタイルが大学生らしいものへとアップデートできずに苦悩する学生の姿がうかがえる。その一方で，サークルや学生プロジェクト活動に参加する機会を得られた学生からは，「サークルに入った自分の決断に今は感謝している」「学生プロジェクトに所属していたため，コロナ禍でも大学生活の思い出はできた」といった声もあり，大学内での人間関係づくりが，大学生活の充実度に関わっている様子がうかがえる。

こうした回答からは，コロナ禍が継続する中でも大学生活全体の充実度や満足度を上げるためには，大学側がオンライン授業で学習機会を保障するだけでなく，学生同

士の交流機会を確保する方策を合わせて検討する必要があると言えるだろう。

④今後の授業形式に対する意向

最後に，2020年度前学期（2020年7月）調査と同様に，新型コロナウイルス流行の収束後，どのような形式で授業が開講されるとよいかを，対面とオンラインのハイブリッド（混合開講）形式を含む6項目[(4)]から選択するかたちでたずねた（表3）。

最も多く選択されたのは「混合開講A」の4割程度で，その他の項目はそれぞれ2割以下となり，「全て教室」がやや減少したほかは，おおよそ2020年度前学期（2020年7月）調査と同様であった。

オンライン授業の評価に対する理由（自由記述）ではオンライン授業に慣れたとの

表3　今後受けたい授業形式

		全て教室	全てオンライン	混合開講A	混合開講B	混合開講C	混合開講D	計
2021年2月調査 回答者数（人）		18	12	52	24	8	16	130
	割合（%）	13.8	9.2	40.0	18.5	6.2	12.3	100.0
参考：2020年7月調査（1年生分）		39	16	82	31	6	23	197
	割合（%）	19.8	8.1	41.6	15.7	3.0	11.7	100.0

（4）　設定した授業形式の6項目は以下の通り。
- 全て教室で開講
- 全てオンラインで開講
- 教室とオンラインの混合開講A（全て教室で開講されるが，オンライン受講も可能）
- 教室とオンラインの混合開講B（各授業を担当する教員が，教室で開講かオンラインで開講かを選ぶ）
- 教室とオンラインの混合開講C（受講人数99名未満は教室で開講，100名以上はオンラインで開講）
- 教室とオンラインの混合開講D（ゼミ・語学・実技・実習は教室で開講，その他の講義科目はオンラインで開講）

設定した教室とオンラインの混合開講形式は，Aは学生側が選べる形式，Bは教員側が選べる形式，Cは受講人数を基準に決定される形式，Dは科目種別を基準に決定される形式である。

回答が散見されたが，このことにより「全てオンライン」や混合開講といったオンライン授業を継続する授業形式の支持が大きく拡大するといったような影響は見られないようである。

３．2021 年度前学期（2021 年７月）調査

３－１．調査概要

このアンケート調査は，2021 年度の香川大学経済学部「地域調査法」受講生に対して実施された。Google Forms で作成したアンケートフォーム「【大学１年生の皆さんへ】オンライン授業への評価と今後の意向に関するアンケート」の URL を授業の第 14 回（2021 年７月 20 日）に示し，授業時間内に回答を促すとともに，授業資料を掲載している香大 Moodle 上に同 URL を約１カ月掲載した。この授業における経済学部１年生の受講生は 225 人，回答数は 180 人，回答率は 80.0％であった。

このアンケート調査は，年度が変わり調査対象者が 2021 年度入学の新１年生となったことから，「オンライン授業への満足度」や「今後の授業形式に対する意向」の設問だけでなく，全ての設問を 2020 年度前学期（2020 年７月）調査と同内容で実施した。

３－２．調査結果ならびに分析

①前年度と比較した受講態度・理解度・自主的学習の自己評価

「前年度の対面授業」「今年度のオンライン授業」[(5)]のそれぞれにおける自己評価について，受講態度はよかったかを５段階（良かった，やや良かった，どちらとも言えない，あまり良くなかった，良くなかった），授業内容を理解できたかを５段階（そう思う，ややそう思う，どちらとも言えない，あまりそう思わない，そう思わない），授業の予習・復習など授業時間外の自主的な学習に取り組んだかを４段階（しっかり取り組んだ，ときどき取り組んだ，ほとんど取り組まなかった，全く取り組まなかっ

（５）　2020 年度前学期（2020 年７月）調査では大学２年生以上も含めて調査したことから「2020 年度３月までの対面授業」「2020 年度４月からのオンライン授業」，2021 年度前学期（2021 年７月）調査では大学１年生のみを対象としたことから「大学入学以前（高校など）での授業」「香川大学でのオンライン授業」という言い方でたずねている。

た）でたずねた。

それぞれの回答を得点化して平均値を算出[(6)]すると（表4上段），前年度の対面授業と今年度のオンライン授業の差は，受講態度が－0.51（4.12→3.61），理解度が－0.49（4.25→3.76），自主的学習が－0.25（3.16→2.91）となり，いずれも平均値が下落した。2020年度前学期（2020年7月）調査と比較すると，受講態度・理解度では下落幅が縮小しており，自主的学習では下落幅が拡大した。

また，自己評価がどのように変化したかを「上昇」「変わらず」「下降」に分けて整理してみると（表4下段），前学期（2020年7月）調査と比較して，受講態度・理解度では「変わらず」の割合が増加し「下降」の割合が減少したが，「上昇」の割合には顕著な違いが見られなかった。一方，自主的学習については「下降」の割合がやや増加した。

前年度の対面授業と今年度のオンライン授業の差には，“対面授業とオンライン授業の差”だけでなく，“高校と大学の授業環境の差（これまでより長い授業時間，「○○学」「○○論」といった専門的な科目，100名を超える大人数講義など）”の影響も考えられる。後者については年度が違っても大学1年生にとって条件は同じであるが，前者については2020年度前学期が「全ての授業がオンライン授業」，2021年度前学期は「主に一部の大人数講義のみがハイブリッド型授業」と実施体制が大きく異なっている。このことから，受講態度・理解度については，2021年度のハイブリッド型授業の導入ならびに対面授業とハイブリッド型授業の混合したカリキュラムにより，2020年度前学期の全面オンライン授業に比べて学生の受講態度・理解度の悪化を軽減することができたと見てよいだろう。

自主的学習については，後述するようにオンライン授業のデメリットとしてあげら

（6） それぞれの回答項目を以下の通り得点化した。
受講態度（良かった：5点，やや良かった：4点，どちらとも言えない：3点，あまり良くなかった：2点，良くなかった：1点）
授業内容を理解できたか（そう思う：5点，ややそう思う：4点，どちらとも言えない：3点，あまりそう思わない：2点，そう思わない：1点）
授業の予習・復習など授業時間外の自主的な学習に取り組んだか（しっかり取り組んだ：4点，ときどき取り組んだ：3点，ほとんど取り組まなかった：2点，全く取り組まなかった：1点）

表４　前年度と比較した自己評価

			受講態度		理解度（理解できた）		自主的学習	
			2021年７月調査	参考：2020年７月調査（１年生分）	2021年７月調査	参考：2020年７月調査（１年生分）	2021年７月調査	参考：2020年７月調査（１年生分）
自己評価平均値	前年度の授業		4.12	4.29	4.25	4.35	3.16	3.30
	今年度の授業		3.61	3.53	3.76	3.58	2.91	3.11
	平均値の差		−0.51	−0.77	−0.49	−0.77	−0.25	−0.19
自己評価の変化	自己評価が上昇		20	16	17	17	27	27
		割合（%）	11.1	8.1	9.4	8.6	15.0	13.7
	自己評価変わらず		90	67	90	81	90	117
		割合（%）	50.0	34.0	50.0	41.1	50.0	59.4
	自己評価が下降		70	114	73	99	63	53
		割合（%）	38.9	57.9	40.6	50.3	35.0	26.9
	合計		180	197	180	197	180	197
		割合（%）	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

れる「授業時間外に作業が必要な課題が多い」の回答率が減少していることから，対面授業の増加（ハイブリッド型授業でも授業回の半数は対面参加）により，出題される課題が減り，課題提出のための作業時間が減少したことが影響しているものと考えられる。

②オンライン授業の満足度とメリット・デメリット

香川大学のオンライン授業に満足しているかを５段階（満足，やや満足，どちらとも言えない，やや不満，不満）でたずねた（表５）。

それぞれの回答を得点化した平均値は4.07となり，2020年度前学期（2020年７月）調査の結果（3.53）と比較すると，満足度が大きく向上したと言える。内訳を見ても，2020年度前学期（2020年７月）調査に比べて「満足」の割合が大幅に増え，「どちらとも言えない」「やや不満」「不満」の割合が減少し，満足度全体を底上げすることができている。

次に，オンライン授業のメリット（利点）・デメリット（欠点）だと感じているこ

表５　オンライン授業の満足度

		2021年７月調査	参考：2020年７月調査（１年生分）
満足【５】		67	34
	割合（%）	37.2	17.3
やや満足【４】		71	78
	割合（%）	39.4	39.6
どちらとも言えない【３】		34	52
	割合（%）	18.9	26.4
やや不満【２】		4	25
	割合（%）	2.2	12.7
不満【１】		4	8
	割合（%）	2.2	4.1
計		180	197
	割合（%）	100.0	100.0
	平均値	4.07	3.53

※平均値は，各評価を【　】内の得点に換算して算出

とについて，それぞれ選択肢を設けて複数回答でたずねた。

まず，オンライン授業のメリット（利点）について見ると（表６），2020年度前学期（2020年７月）調査に比べて各選択肢の回答率に大きな違いは見られず，「通学時間や身だしなみに気を使わなくてよい」（90.6%），「どこからでも授業に出席できる」（74.4%）を多くの学生がメリットと感じている。一方，オンライン授業のデメリット（欠点）については（表７），2020年度前学期（2020年７月）調査に比べて「特にない」の回答率が増加し（1.5%→11.7%），その他の選択肢はいずれも回答率が減少した。

回答率の高い選択肢を見てみると，「授業前後に教員や友人と話すことができない」（62.9%→31.1%）や「授業時間外に作業の必要な課題が多い」（66.5%→31.1%）は減少幅が特に大きく，同じオンライン授業でも実施形式として新たにハイブリッド型が導入された2021年度ではオンライン授業のデメリットとして感じられにくくなっているようである。ハイブリッド型授業では，同じ授業科目の中でも対面参加できる

表６　オンライン授業のメリット（利点）

		通学時間や身だしなみに気を使わなくてよい	どこからでも授業に出席できる	人目を気にせず発言や質問ができる	自分のペースで勉強ができる	特にない	その他	合計
2021年７月調査		163	134	40	74	0	6	180
	割合（%）	90.6	74.4	22.2	41.1	0.0	3.3	100.0
参考：2020年７月調査（１年生分）		185	132	38	69	2	4	197
	割合（%）	93.9	67.0	19.3	35.0	1.0	2.0	100.0

表７　オンライン授業のデメリット（欠点）

		対応機器や通信料の負担がかかる	授業用のソフトウエア（Ｚｏｏｍなど）をうまく操作できない	授業に集中しにくい、疲れる	話の流れがつかみにくい	授業前後に教員や友人と話すことができない	授業時間外に作業の必要な課題が多い	特にない	その他	合計
2021年７月調査		29	16	94	46	56	56	21	0	180
	割合（%）	16.1	8.9	52.2	25.6	31.1	31.1	11.7	0.0	100.0
参考：2020年７月調査（１年生分）		48	29	149	70	124	131	3	8	197
	割合（%）	24.4	14.7	75.6	35.5	62.9	66.5	1.5	4.1	100.0

回があることで，教員が課題として理解度などを確認する必要が少なくなり，学生も対面参加の授業時に教員や友人と話す機会ができており，オンラインで授業参加をする際のデメリットが軽減されていると考えられる。

また，「授業に集中しにくい，疲れる」（75.6%→52.2）や「話の流れがつかみにくい」（35.5%→25.6%）といった画面越しの受講に伴うデメリットについても，回答率が３分の２程度に減少している。これらについても，対面参加できる授業（の回）があることで，疲れの蓄積を防いだり，オンライン授業で理解できなかった部分を

補ったりすることができ，デメリットが軽減されていると思われる。

オンライン授業の満足度，メリット，デメリットの回答からは，ハイブリッド型授業が導入された2021年度前学期は，オンライン授業に対する満足度が高く，メリットは維持しながらもデメリットは軽減されているということがわかった。

しかしながら，現在のハイブリッド型授業のやり方に課題がないわけではない。自由記述でたずねた「今後もオンライン授業が継続されるとしたら改善してほしいこと」の回答では，現在のハイブリッド型授業に対する意見や要望の声が多く寄せられた。その内容は，オンラインで参加する学生と教室で参加する学生がいる状況に対応するための教員側の授業運営の課題（「ハイブリッドだと，先生は対面の人よりzoomの人へ向けて話しているように思う」「ハイブリッド型の時にパソコンから離れた場所で話をする先生が時々いるのだが，zoomへの音ののりが悪くなる時があるので気を付けてほしい」）や，オンラインで参加する授業と教室で参加する授業が混在する状況に対応する学生側の学内受講環境の課題（「１日の中で，オンラインで実施する授業と対面で実施する授業があるととても困る」「空き教室への移動，パソコンの接続をするのに10分という休み時間は短い」），教室で受講する学生を隔週で入れ替える仕組みの複雑さの課題（「学籍番号が偶数奇数で交互に出席する制度はややこしい」「一週間ごとに対面・リモートにするのではなく，1Q・2Qごとに対面・リモートを交代してほしい」）と多岐にわたる。また，学生の選択の自由度を増す方策として「オンラインか対面かを自分で選んで受講できるようにして欲しい」と要望する回答も見られた。

③今後の授業形式に対する意向

2-2④と同様に，新型コロナウイルス流行の収束後，どのような形式で授業が開講されるとよいかを，ハイブリッド（混合開講）形式を含む以下の６項目から選択するかたちでたずねた（表８）。

最も回答率が高かったのは「混合開講Ａ」の５割強で，その他の選択肢は最多の「全て教室」でも１割強程度となった。「混合開講Ａ」が最多であるのは2020年度前学期（2020年７月）調査と同様であるが，回答率が増加して半数を超えている。2021年度

表８　今後受けたい授業形式

		全て教室	全てオンライン	混合開講A	混合開講B	混合開講C	混合開講D	合計
2021年７月調査		21	18	98	17	10	16	180
	割合（%）	11.7	10.0	54.4	9.4	5.6	8.9	100.0
参考：2020年７月調査（１年生分）		39	16	82	31	6	23	197
	割合（%）	19.8	8.1	41.6	15.7	3.0	11.7	100.0

前学期のハイブリッド型授業は，各学生の授業形式は決められているものの，教室で行われている授業と同じものがオンラインで同時配信されているという意味では「混合開講Ａ」に近い形式である。学生が実体験を踏まえた上で「混合開講Ａ」を支持し，その回答率が2020年度前学期（2020年７月）調査よりもさらに増加したことは，ハイブリッド型授業という形式の導入に対して学生から一定の支持が得られていると考えてよいのではないだろうか。

４．調査結果からの考察

ここまで，2020年度後学期（2021年２月）調査と2021年度前学期（2021年７月）調査を，それぞれ2020年度前学期（2020年７月）調査と比較しながら整理した。それらから得られた結果をまとめると，以下のようなことが指摘できる。

①大学側では新型コロナウイルス感染対策と学生の大学生活の充実との両立を実現すべく，それぞれの学期において授業の実施体制を検討・実施してきたが，2020年度後学期のようにオンライン授業中心で一部のみ対面授業という実施体制では，学生のオンライン授業に対する満足度を高めることはできなかった。

②一方で，対面授業中心で一部のみをオンライン授業とした2021前学期は，2020年度前学期に比べるとオンライン授業に対する満足度を高めることができた。対面授業中心の授業体制を実現するために導入されたハイブリッド型授業は，2020

年度７月調査でコロナ禍収束後に受けたい授業形式として支持が高かった「混合開講Ａ」に近い授業形式となっており，ハイブリッド型授業を経験した2021年度１年生からの「混合開講Ａ」の支持（2021年７月調査結果）は2020年度７月調査に比べてさらに高くなった。このことを踏まえるならば，ハイブリッド型授業の導入は新型コロナウイルス感染対策と学生の大学生活の充実との両立の実現に，おおむね成功したと評価できるのではないか。

③しかし，現行のハイブリッド型授業の実施方式（対面授業学生の隔週入れ替え）には学生にとって確認や移動の手間の複雑さ，時間割編成などにおいて課題がある。

上記の③に関しては，課題を踏まえた今後（主にコロナ禍の影響が低減しつつも残っていると予測される2022年度～2023年度を想定）のオンライン授業の実施方式について考察を加えたい。本稿で示された課題に対して対処方法を個別に検討・実施するということも一案だが，希望者への新型コロナウイルスワクチンの接種一巡後については2021年度前学期の状況よりも教室における感染リスクが低減することから，ハイブリッド型授業を対面で受講するかオンラインで受講するかを学生個人の選択に任せる「混合開講Ａ」の本格導入も一案として検討できるのではないかと思われる。

この場合，対面参加する学生が殺到して教室が“密”になることが懸念される。しかし，2021年７月調査でのオンライン授業のメリット（利点）に対する回答から考えるとオンライン授業を支持する学生が多数存在していることがうかがえ，ほとんどの学生が教室での対面授業を希望することになるとは考えにくい。

2021年度前学期に筆者の担当したハイブリッド型授業では，学生からの問い合わせに対する回答として「採点の際には，各回の授業を対面で出席したか，オンラインで出席したかを考慮しない。対面出席のデータとオンライン出席のデータを単純に合算して全体の出欠データとする」と受講生全体に採点方針を示したところ，翌週以降の授業は教室で対面受講する学生が大幅に減少した。具体的には，受講生の３/４程度がオンラインで出席しており，つまり，本来は教室で受講するはずの学生の半数がオンラインで出席したことになる。この傾向はその後の授業でもほぼ同様だった。こ

れは期せずして「対面もしくはオンラインでの受講を選択する自由を学生に与えた場合にどのように振る舞うか」を確認する実証実験となった。

実際に「混合開講Ａ」の本格導入前には学生の意向調査などをして実数を確認する必要はあるだろうが，こうした筆者の実体験から，受講する学生全体に授業開始当初から対面もしくはオンラインでの受講を選択できるようにした場合でも，教室での対面授業を希望する学生は現行の実施方式での教室の受講人数と同等の半数程度に留まるのではないかと予測される。

ただし，「混合開講Ａ」の運用時には，オンライン授業の受講経験がほとんどなく，自分が対面授業とオンライン授業のどちらを選んだらよいか判断材料に乏しい前学期の１年生に対しては，配慮を検討する必要があるだろう。例えば，４～５月の授業を現行のハイブリッド型授業（対面授業学生の隔週入れ替え）で実施し，その後に「混合開講Ａ」の方式とするような方法が考えられる。